

JFA第35回全日本O-30女子サッカー大会

兵庫県2級審判員 徳山麻実子

【目次】

- 1.はじめに
- 2.大会概要
- 3.事前研修
- 4.担当試合振り返り・各日研修
- 5.大会を通しての振り返り



1.はじめに

3月16日～18日の3日間、静岡県で開催されましたJFA第35回全日本O-30女子サッカー大会の参加報告をさせていただきます。推薦していただいた関西サッカー協会ならびに兵庫県サッカー協会 の皆様に感謝を申し上げますとともに、大会を円滑に運営していただいた全ての大会関係者の皆様様に感謝申し上げます。

2.大会概要

日程：2024年3月16日(土)～3月18日(月) 開催地：静岡県

出場チーム：全国9地域協会から選出された16チーム

大会形式：16チームを4チームずつ4グループに分けてリーグ戦を行う。

1次ラウンドにおける順位決定方法は、勝点合計の多いチームを上位とし順位を決定する。勝点合計が同じ場合は、①全試合の得失点差②全試合の総得点数③当該チーム④抽選で順位を決定する。

2次ラウンドは各グループの順位ごとの4チームによるノックアウト方式で行う。順位を決定するためノックアウト1回戦敗者同士の試合も行う。



3.事前研修会

- ・自己紹介
- ・レフリーとは
試合を公平・公正・安全に進める
…**選手が最高のパフォーマンスを発揮できるように支える**
※レフリーチームは3つ目のチームである
る 勝敗を競い合い、感動を与える2つ
のチーム
→2つのチームを支える3つ目のチームがレフリーチームである
感動を届けると同じ目標と一緒に向かっている
- ・大会テーマの確認
「**基本を大切にし、レフリーとしての土台を築こう!**」

4.担当試合と各日の振り返り

【大会1日目(3/16)】

〈担当試合①〉

1次ラウンド SOCIOS FC VENGA 2-0 刈谷FCプロジェクトソニア

主審:徳山麻実子、副審:岡村美季氏（関東）、加藤亜依氏（静岡）

第4審:秋永陽英氏（静岡） Ins:鮎貝志保氏

【試合内容】

主審を担当しました。大会は3日間あるので、疲労の蓄積が最小限になるよう、先を予測した前よりのポジショニングを意識して臨みました。

前半は両チームともにパスが繋がらず、密集の中でボールを奪い合うシーンが多くありましたが後半はパスが繋がり、前半よりもフィールドを広く使ってプレーしていました。ファウルを数回取りましたが、密集での奪い合いの中ではなく、自陣ペナルティエリア付近でのアフターや、カウンターからの抜け出しに対するホールディングでした。いずれも強度は高くなかったため、カードは出ませんでした。ファウルを取った際に「なんで?」という声があがったり、ジェスチャーで示すことがありましたが、取った瞬間だけであり、その後は素直に従っていました。

【振り返り】

先を予測して動き出し、前寄りのポジションを取ること意識して挑みましたが、前半は両チームともにパスがうまく繋がらなかったため、次の動きを予測することが難しかったです。そのため動き出しが遅れ、後追いすることが多くなりました。後半はパスが繋がるようになったので、次の動きを予測しやすくなり、スプリントをかけずに争点の近くにポジションをとることができました。

これについて試合後のフィードバックで鮎貝氏から、キッカーに正対したポジショニングをしているため前方（背後）の様子が見えなくなるとの指摘を受けました。改善策としては、ファーストディフェンダーの後ろに入るということを指導していただきました。そうすることでキッカーからのパスが自分に当たる可能性を消せるため、落ち着いて前を確認することができるということでした。

その他、笛の吹き方についても指摘を受けました。レフリーが自分の思いを伝える方法のひとつに“笛”があり、表情・シグナルの出し方・動き（ダッシュする等）を合わせることで「二度としないで!」等の思いを乗せることができるとの指導をいただきました。

ランニングフォームやシグナルは綺麗であり、また選手の声に動じずにファウルをとっていた点は良かったとのことでした。これらは主審にとっての大事な要素であり、特に「声に動じずにファウルを取る」に関しては、これが出来たから選手はそれ以上何も言わずに戻ったのだと教えていただきました。

【課題】

- ・前方（背後）の動きを予測するポジショニング
→ファーストディフェンダーの後に入ること、前方（背後）の様子を落ち着いて確認することができる。
- ・笛の吹き方
→表情・シグナルの出し方・動き（ダッシュ等）を合わせ、思いをのせるようにする

【良かった点】

- ・ランニングフォーム、シグナルが綺麗だったこと
- ・選手の声に動じずにファウルを取っていたこと

〈担当試合②〉

1次ラウンド リトルスターズ 3-0 刈谷FCプロジェクトソニア

主審:岡村美季氏（関東） 副審:徳山麻実子、加藤亜依氏（静岡）

第4審:間島美奈子氏（東海） Ins:真殿三加氏



【試合内容】

副審1を担当しました。後半、本部近くで刈谷FCの選手が倒れました。私からは後方からのトリッピングに見えましたが、主審は笛を吹きませんでした。その時主審と目が合ったので、争点は主審から十分に見える位置ではありませんでしたが、ファウルサポートを求められていると思い、フラッグアップしました。

同じく後半に、リトルスターズ陣内のペナルティエリア付近において、刈谷FCの選手が足を高く上げたところにリトルスターズの選手が頭でプレーしようとしたシーンがあり、主審は笛を吹きませんでした。「ファウルサポートするべきだった。」と後になって反省しました。

後半23分が経過したところで主審はアディショナルタイムを2分と示しましたが、1分程残して試合終了の笛を吹いてしまいました。4審が誤りにいち早く気づき、私に確認を取りました。私は主審に声をかけながら走り寄って行き、1分程残っていることを伝えました。主審は選手に「まだ終わっていませんでした！」と声を掛け、アウトオブプレーであったのでスローインからの再開を促しました。選手は主審の声掛けに素直に従ってくれました。

【振り返り】

この試合で私はファウルサポートを2回行いましたが、どちらの判定も不安を持ちながらサポートしてしまい、自分自身不甲斐ないと感じていました。

一度目のファウルサポートについては、事象は主審から見える位置であったものの、目が合ったのでサポートを求められていると思いフラッグアップしました。私のこれまでの経験では、主審・副審を通してタッチジャッジ以外で目を合わせるということはなく、私自身がそうする時は迷っている時でした。そのため自分の基準でサポートを求めているのだと勘違いをしてしまいました。

次に足を高く上げ、それがわかった上で相手が頭でプレーしようとしていた場面ですが、一見後からボールにチャレンジした側が悪く見えそうですが、そうではなく「相手選手が近くにいるにも関わらず足を高くあげてプレーしたことは、安全面で配慮に欠ける行為として見る」とインストラクターから教えていただきました。

ファウルサポートを行う際は主審との連携と的確な事象の見極めが必要であり、細心の注意を払わなければならないことを改めて認識することができました。

【課題】

- ・ 試合前の打ち合わせを詳細に行う
 - 相手が上級者であっても、「いつも通りで」の一言で済まさない
 - 主審が副審に対してファウルサポートを望んでいるかどうか、また望んでいる場合はどのように行えばいいか（タイミング、場所、合図）等を擦り合わせる
- ・ 判定基準を理解する
 - … 相手が近くにいる状況での怪我をさせるリスクの高い行為については、タイミングは優先しない

【良かった点】

主審が試合終了時間を間違えたことに対して、審判団として臨機応変に動くことができた点は良かったと思います。

〈研修1日目〉

① ポジショニングについて（鮎貝志保氏）

動画を見ながら国際審判員の動きについてディスカッション

- ・ ボールホルダーが蹴り出す前に選手の動きを確認
 - 争点に寄りすぎず、全体が見える位置をとる
 - 首を振って周りを見る事で情報を収集する



この動画の中で主審は、迷うことなくベストなタイミングでアドバンテージを取ることができました。それはボールを見ながらも前を見ることが出来ていたから。つまり事前準備（首を振って情報収集）をしていたからこそ全体が見えるポジションを取ることができ、次の展開を予想できたということでした。

また右サイドからのクロスボールに対しては、サイドステップで横に開きながら移動することで視野を確保していました。

② フリーキックマネージメントについて（真殿三加氏）

実際に動いて再現しながらディスカッション

- ・ 壁を安心して作るにはどうすればよいか
 - 「笛で再開します。」という声かけをする



【手順】

1. ファウルの笛
2. シグナル
3. ボールセット ※ボールの位置を基準に下げる
4. クイックの保障
 - ・ 蹴れそうなら様子を見る
 - ・ ボールに近付いて邪魔するような動きを見せる、またクイックされた時に異議が出る可能性はないか
5. 壁のコントロール
 - 相手が前に居て蹴れない場合は笛で介入
6. 再開時のポジション

フリーキックマネージメントについて、一連の流れをグループ内でデモンストレーションし、その後発表しました。手順に大きな違いはありませんでしたが、壁のコントロールについて、キーパーを基準に行えばコントロールしやすいという意見が出ました。初めて聞いた方法であり、コントロールし易そうだと感じたので、今後取り入れてみようと思いました。

③時間の管理について（浅井昭子氏）

試合開始時間がピッチ毎に前後10秒程ずれていた。時計を時報に合わせて、00分に開始の笛を鳴らすようにする。

【大会2日目3/17）】

〈担当試合①〉

1次ラウンド 横須賀シーガールズレディース 1-0 ENSOWA KUMAMOTO

主審: 富永華氏（東海）

副審: 徳山麻実子、高野雅人氏（静岡）

第4審: 小野晃正氏（静岡） Ins: 鮎貝志保氏



【試合内容】

副審1を担当しました。担当するにあたり、主審と差し違えることのないように、慌てず主審のシグナルを待ってから上げることを意識しました（特にレフリーサイド）。

主審は試合前のチェックから「チェック1分前です！」と選手に声を掛け、時間の管理をしっかりと行なっていました。前半は特に大きな問題もなく、横須賀シーガールズレディースが1点を先制して終わりました。

後半23分が過ぎたあたりで、主審はアディショナルタイム2分のサインを出しましたが、4審が把握しておらず、アディショナルタイムが1分半程過ぎてもピッチとベンチに時間が知らされませんでした。主審の「ボードを立て掛けてください！」という声で4審がアディショナルタイムを把握していないことに気づき、2分の表示をするよう伝えました。その時点でアディショナルタイムは終了間近を迎えており、ベンチからは「交代ができない。」と声が上がりました。

【振り返り】

主審は試合前の打ち合わせ、時間の管理をしっかりと行っていました。アディショナルタイムの表示についても、試合前の打ち合わせで「主審が示した後にボード上に数字を作る」、「合っていれば25分に両チームに示し、ボードを立てかける」と4審に伝えていました。しかし4審は言われた事を理解していなかったようで、遂行できませんでした。主審も私も、アディショナルタイムを伝達した際に4審の様子に違和感を覚えていましたが、「打ち合わせしたし分かっているだろう。」との思い込みで、フォローを怠ったことが、この事象での問題だったと思います。

アディショナルタイムの伝達が行われた時、私はハーフライン近くに居たので、「2分ですわね。」と声を掛けるべきでした。

【課題】

アディショナルタイムについて、4審だけに任せずに副審も協力する。

【良かった点】

タッチジャッジにおいて、主審との差し違えはなかった。

【担当試合②】

順位別ノックアウト 大和シルフィード98 0-2 Legame

主審：徳山麻実子

副審:高野雅人氏（静岡）、縄田俊氏（静岡）

第4審:若杉慈子氏（東海） Ins:真殿三加氏



【試合内容】

主審を担当しました。

前半は特に難しい場面もなく、Legameが1点を先制してハーフタイムを迎えました。

後半、Legame陣営のペナルティエリア内において、ゴールキーパーへのバックパスを取りました。Legame選手達からは「あれはパスじゃないだろう！」と声が上がりましたが、グラウンダーのボールでスピードもなく、対応するのに難しいものではなかったこと、体がキーパーの方へ向いていたことを挙げ、バックパスと判断したと説明しました。説明に対してLegameの選手は「はい、わかりました！」と応じてくれました。

その後、Legame陣内のベンチと反対側サイドでファウルがありました。笛でプレーを止めてセレモニーに入り、壁を調整したところでキッカーの後方にポジションを取りました。

またその後、大和シルフィード陣内ペナルティエリア内において、キーパーチャージを取りました。キーパーとオフェンスの選手がボールの取り合いで接触し、キャッチしたボールをキーパーが離してしまいました。そこへ再びオフェンスの選手が向かおうとしたところで笛を吹きました。Legame選手からは「ファウル？ドロップ？どっち？」と尋ねられました。ファウルであると伝えると、素直に応じてくれました。

またこの試合は、前半から選手交代が何度もありました。交代選手がピッチから出る際、「近くから出るように。」という声かけが遅れ、時間がかかってしまいました。

【振り返り】

キーパーへのバックパスについて、インストラクターの真殿氏からは「競技規則上は間違いではない。ただ、深く考える必要はある。」との指摘を受けました。ファウルを判定するにあたって、競技規則の精神を理解する必要があると指導していただきました。

競技規則の精神とは、サッカーがフェア（公正・公平）であるためには競技規則が必要であり、美しいゲームにとっての重要な基礎である、というものです。公平・公正であるというのは簡単に言うと「狡いことをしない」ということであり、この中には遅延行為が含まれます。今回のバックパスについて、選手側にこのような意図があったのかどうかを考える必要があります。今大会のレベルを考えるとその可能性は低く、厳しい判定かもしれないという意見でした。

審判団の今大会におけるテーマは「基本を大切にし、レフリーとしての土台を築こう！」であったので、とても貴重なアドバイスを頂きました。

次にフリーキック時のポジショニングについて、セレモニー後に自身がポジショニングする際、キッカーの前を横断することや開始が遅れることを気にしたことで、不適切な位置を選ぶことになりました。笛でプレーを止めていたので、上述のようなことを気にする必要はありませんでした。今後は落ち着いてポジションを取りたいと思います。

また真殿氏からは、争点から逆算してポジショニングするというのを教えていただきました。

キーパーチャージについて、キーパーとオフENSEの選手がボールの取り合いで接触し、キャッチしたボールをキーパーが離してしまい、そこへ再びオフENSEの選手が向かおうとしたところで笛を吹きました。一度目の接触ではなく、再度接触の危険性があると判断して笛を吹きましたが、笛のタイミングが遅かったこと、また「ピピッ」と2回吹いたことが、選手を混乱させたのではないかと思います。

真殿氏からも、キーパーチャージで間違いではないが、1度目の接触で笛を吹いた方が良かったと指導していただきました。

選手交代について、後半、Legameの選手が遠い位置からピッチを出ようとしていたことに気づくのが遅れました。大和シルフィードの選手が「反対から出たらよくない？」と言っているのが聞こえ、そこで初めて気が付きました。Legameは2点差で勝っており遅延行為になるので、交代の声が上がった時に意識するべきでした。またアウトの選手がどこにいるのかを教えてもらうよう、4審や副審と事前に打ち合わせをするべきでした。

【課題】

- ・ ファウルを判定するにあたって、競技規則の精神を理解する
- ・ フリーキック時のポジショニングについて、争点から逆算してポジショニングする
- ・ キーパーチャージについて、接触前に笛を吹く
- ・ 交代について、アウトの選手に「近くから出るように」と促す

【良かった点】

どの判定においても、自分で考えて迷いなくしているように見えたこと。

〈研修2日目〉

①レッドカードの判定について（真殿三加氏）

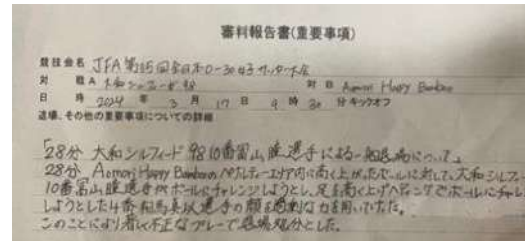
この日の試合でレッドカードを出した事象についてディスカッションしました。

事象は、ペナルティエリア内でのオフェンス側のハイキックで、ディフェンス選手の額に足裏が接触したというものでした。

レッドカードとなったポイントは

- ・足裏が入ったこと
- ・額より上に入ったこと
- ・強度が高かったこと

の3点が挙げられました。



ディスカッションの議題は、ハイキックとほぼ同時にボールに向かう選手がいた場合、どちらのファウルとなるかについてでした。

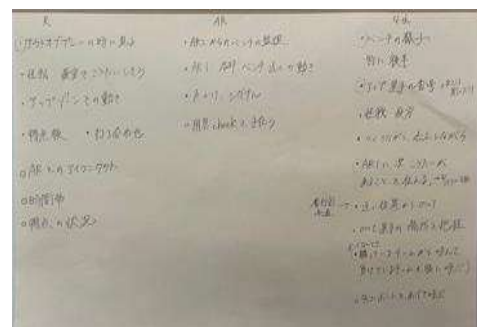
私のいたグループでは、最初は「周りに人がいることが分かってしているなら、ハイキック側にファウルを取る」という意見が出ていましたが、「もしハイキックのタイミングの方が早くて、わかったうえで突っ込んでいったら?」「ハイキックした選手の後から突っ込んできたら?後ろからだったらハイキックした側も（背後に選手がいたと）気づけないと思うけど。」という意見が出ると、答えに迷う場面がありました。

このディスカッションのポイントとしては、“相手が近くにいる状況であれば、タイミングよりリスクを考える”ということでした。たとえハイキックが早く行われたとしても、怪我をさせるリスクの高い行為なのでタイミングは優先しない、つまりハイキック側のファウルということでした。

グループディスカッションの中で、「ハイボールに対して、そもそもハイキックじゃないといけないのか?ヘディングではダメなのか?」という意見が出たのですが、私はそのような視点で見たことがなかったので、とても印象的でしたし、リスクの高い行為と考えるうえで参考になりました。

②交代がスムーズに行えるための気づきについて（鮎貝志保氏）

明日の試合は頻回な交代が予測されるため、円滑に交代の手続きを行うにあたって主審、副審、第4の審判に必要な気づきについてグループディスカッションしました。



この中で、両チームから交代が出た場合「勝っているチームから呼ぶ」というものがありました。理由は「勝っているチームは時間をかけて交代を行う。負けているチームは素早く交代するから、交代終了のタイミングが同じになる」というものでした。初めて聞いたものだったので、印象的でした。

③負傷者への対応について（鮎貝志保氏）

大会3日であり、負傷者が多く出ることが予想されます。負傷した選手に対してどのような声かけをするかについて、グループディスカッションしました。

負傷が軽傷であると予測される場合、大抵は「大丈夫ですか？」「続けられますか？」「出来ますか？」という声かけをすると発表していました。頭部や腹部の打撲で重症が疑われる場合は、「（頭部の場合は）頭を打っているので脳震盪の疑いがあります。なのでスタッフを入れますね。」と声をかけるという意見が多くありました。

ここで講師の鮎貝氏から、大事なのは軽症かどうかの判断をレフリーが最初にと、と話がありました。負傷したからといって、なんでもスタッフを入れないように注意するとのことでした。またグループ内では、「大丈夫？」「出来る？」と聞くと、選手は大抵「はい。」と答えるという意見が出ました。この場合、軽症で「出来る」と返答してもなかなか立ち上がらないケースがあったり、また重症の疑いがあっても「出来る。」と返答するケースもあります。

まず重症と軽症の判断基準ですが、頭部や腹部の打撲が疑われる場合は重症と判断します。この場合は、発表でも出ていた「頭部（もしくは腹部）の打撲が疑われるからスタッフを入れますね。」がベストな声かけになるのではないかと思います。重症でないと判断した時の声かけとしては、「立てますか？」よりも「立ちましょう。」がベストではないかと思います。「立てないようならスタッフを入れます（または担架を入れます）」という、軽症の場合はすぐに立ちあがる人が多い印象です。もし軽症ではない場合は、素直に応じてくれると思いました。

【大会3日目(3/18)】

〈担当試合①〉

順位別ノックアウト 刈谷FCプロジェクトソニア 3-1 横須賀シーガールズレディース

主審:小野田伊佐子氏（東海） 副審:河野由依氏（東海）、横山滉泰氏（東海）

第4審：徳山麻実子 Ins：真殿三加氏

〈試合内容〉

第4の審判を担当しました。担当するにあたって、前日の研修でテーマに上がった選手交代をスムーズに行うことを意識しました。

前半は選手交代なく、横須賀シーガールズレディースが2点を先取して終了しました。

前半のアディショナル終了間際に、刈谷FCプロジェクトソニアにPKが与えられました。PK開始前に主審が両チームの選手達に何かを伝えていましたが、こちらまでは聞こえませんでした。PKではボールはゴールポスト上段に当たり、ボールはペナルティエリアの方へ跳ね返りましたが、両チームとも競り合うことはなく、前半は終了しました。

後半は交代が何回かありました。一度に2名以上の交代で、交代ボードの作成はせず、口頭でアウトの選手を伝えました。

また後半は、刈谷FCプロジェクトソニアの選手が自陣ペナルティエリア内でショルダーチャージを受けて倒れる場面がありました。主審が状況を確認している間、近くに居た副審から「担架の準備をしてもらってください。」と声をかけられました。それからすぐに主審から担架の合図が出たので、ピッチ内に入ってもらいました。運ばれた選手は倒れた際に頭を打ったようで、ベンチで休むことになりました。

その後は両チーム共に何もなく、3-1で試合は終了しました。

〈振り返り〉

交代については試合前に主審から、交代ボードをすぐに作れないようなら無理して作らず、スピードを優先してくれたら良いと言われていたので、交代ボードの作成はせず、口頭でアウトの選手を伝えました。結果、タイミング良くスムーズに行えたと思います。

負傷者の対応については、刈谷FCプロジェクトソニアの選手が倒れた時、事象は見ていたものの「スタッフを入れるか、担架を入れるか」という4審としての準備ができていませんでした。また担架を入れる際も、何も考えずに入れてしまいました。ピッチ内に入ってもらった後に副審から、「最短距離で移動できるように、怪我人のいる場所と平行な位置から入ってもらうといいですよ。」と教えてもらいました。

前半のPK時に主審が選手に対して行った声かけについて、前半終了後に選手に何と声かけしたか確認したところ、「時間がないから蹴ったら終わりにするからと伝えた。」という事でした。事前に「時間がないから蹴ったら終わり」と伝えたことで、両チームともに不満の声もなく、スムーズに前半を終了させることができたと思います。

負傷者が出た際の第4の審判員の動き、また副審のサポート、試合終了間際のPKにおける主審のマネージメント等、学ぶことの多い試合でした。

〈課題〉

- ・ 担架要請、搬入について

倒れた選手の様子だけ見ないようにし、主審の合図に意識を向けるようにする。また担架搬入に際しても、最短距離で行けるよう誘導する。

〈良かった点〉

- ・ 交代時、ボードを無理に作らなかったことでスムーズに行えた。ただ今後は作成できるように慣れる必要はある。
- ・ 担架要請・搬入時に、副審の声かけによるサポートがあった。
- ・ PK時に主審が事前に選手に「時間がないから蹴ったら終わり」と伝えたことで、両チームともに不満の声もなく、スムーズに前半を終了させることができた。

〈担当試合②〉

順位別ノックアウト おいでやす京都 1-0 Arancio Giocare Fiore

主審：徳山麻実子

副審:渡辺敏樹氏（静岡）、稲田博之氏（静岡）
第4審：小野田伊佐子氏（東海）

Ins:浅井昭子氏



〈試合内容〉

主審を担当しました。この試合では、ボールホルダーに正体してポジショニングをすること、交代に際しては近くから交代してもらうよう目を配ることを意識しました。

前半、おいでやす京都のベンチ前で、副審とタッチジャッジを差し違えることがありました。自分からは最後に触ったのがArancio Giocare Fioreであることがはっきり見えてましたが、副審が迷いなくおいでやす京都側のシグナルを出したので、ジャッジを譲ってしまいました。選手側からもどちらが触ったか明らかであったので、「逆やろう！」と声が上がりました。その時、第4審から交代の声が上がったので、まず交代の手続きをしてから、もう一度笛を鳴らしてタッチジャッジを訂正しました。「自分もそう（おいでやす京都ボール）だと思ったけど、副審を優先してしまった。すいませんでした。」と謝ると、両チームとも「大丈夫、全然いいよ。」と言ってくれました。

前半終了間際、本部側レフリースイドでおいでやす京都に対する後方からのトリッピングがありました。ファウルの判定に対し、両チームともに声は上がりませんでした。

後半に入り交代が2回ありましたが、どちらも時間はかからなかったので、アディショナルタイムは0分としました。

〈振り返り〉

副審との差し違いについて、自分の位置から明らかに見えていたにも関わらず、副審のジャッジを優先してしまいました。今大会に限らず、よくしてしまうことで、自信がある様子でフラッグアップされると相手を優先してしまうことがあります（実際は、副審は混乱していたとのこと）。今後はすぐに優先せずに、まずキャンセルのシグナルを出す、それでも変わらないようなら選手の反応を見て判断するようにしようと思います。

後方からのトリッピングについて、カードは出しませんでした。ペナルティエリア付近であったので強めの笛を吹きました。インストラクターからは、笛のタイミングと強さはとても良かったと言われました。ただ、良かっただけにカードが出なかったのが残念だったとも言われました。あの場面ではラフ、SPA(大きなチャンスとなる攻撃の妨害)は考えるべきだったと指導していただきました。第4審に入っていた小野田氏からも同様の指摘を受け、「あのスピードで来られてたらラフを考える。」と教えていただきました。

SPAかどうかに関しては、視野が狭かったため判断できなかったのだと思います。またラフに関しては、自分の中での危険な強さ、スピード、距離の基準が明確でないことが、判断できなかった原因だと思います。

これについて小野田氏に相談した際、より客観的に試合を観る、楽しむことの大切さを教えていただきました。「試合を観戦してる時、“危ない”とか“チャンスだったのに”って思うでしょ。あんな感じで客観的に楽しんだらきっと見えるよ。」ということでした。

ここへ行き着くまでは、実はいくつものステップを踏む必要があるのかもしれませんが、この考えを忘れずに試合に臨んでいきたいと思います。

ポジショニングについて、ボールホルダーに正対せずにポジショニングを取ることを意識し、少し離れて体を開いてみましたが、見たい場所を見ることはできませんでした。今後は今回よりもサイドに開いて位置取りしてみようと思います。

アディショナルタイムについて、交代が2回ありましたが、時間を要していなかったので、アディショナルタイムは0分としました。

試合終了後、小野田氏から「1分でも良かったと思う」と指摘を受けました。交代に時間はかかっていなかったが、回数は2回であること、アディショナルタイムを0分として、試合の流れによっては0分では終われないこともある。それであれば、1分として、1分きっかりに終わるのも良いと思うとのことでした。

交代がある中での1分弱であれば、両チームともに不満が出る可能性が低いように感じたので、今後はそうしてみようと思いました。

〈良かった点〉

タッチジャッジを差し違えることがあったが、胸に手を当て再度、主審の判断とアピールしてジャッジを変更した点は良かったと、浅井氏から言っていただきました。

5.大会全体を振り返って

色々あった3日間でした。3日間を通して、失敗のなかった日は1日もありませんでした。またチャレンジをしなかった日もありませんでした。

チャレンジと言っても、とても小さなものだったと思います。今大会に参加するまでしたことのないことをした、というものです。

恥ずかしながら今大会に参加するまで、ファウルサポートも、ハイキック、キーパーへのバックパスに対するファウルも取ったことはありませんでした。

結果的に適切な対応ができていない場面があったことは反省しつつもその反面、新たな気づきを得ることができました。

失敗しながらも「明日も何かやってみよう」と思えたのは、インストラクターの方々をはじめ、共に参加した地域の審判員の支えがあったからだと思います。

このような貴重な機会を与えていただいた関西サッカー協会、兵庫県サッカー協会の皆様に、深く感謝申し上げます。

今大会で得られたことと仲間を大切に、これからも精進して参ります。今後ともご指導の程、よろしくお願いいたします。



審判仲間と共に